

## 第3回

## 子どもの主体性を育てるための環境とは 一身近な生活を見直す一



講師 永倉 みゆき 氏

## 1 はじめに

森は外から見るとみんな一緒の木に見えますが、近づいていくと1本1本違ってきます。子どもも同じです。保育というのはそういう風に子どもを見る仕事なのだと思います。

## 2 環境をどう捉えるか

## (1) 保育所保育指針の中の捉え

## 第1章1(3) 保育の方法 ア及びオ

一人一人が様々な状況に置かれていることを理解し、不安を感じている、落ち着いてきた等実態を把握しながら、主体としての思いや願いを受けとめるということが大切です。

子どもが自発的・意欲的に関わる環境を構成することが大切です。毎年恒例だからという理由ではなく、乳幼児期にふさわしい体験が得られるかどうかを考え、生活や遊びを通して総合的に保育していきます。

## (2) 幼稚園教育要領解説の中の捉え

総則幼稚園教育の基本4 計画的な環境の構成 ①幼児の主体的な活動と環境の構成

子どもが意欲をもって、周囲の環境に関わっていくことができるような環境があり、そこで主体的に活動を展開することが、幼児期の教育と言っています。

主体性を育てるための環境をどう作るかと考えたときに大切なことは、保育者が今ある環境をどのように認識していくかということです。園庭が狭い、保育室が広い等、その環境なりの良さや苦勞があります。自園の特徴を把握し、その中で子どもにとって意味のある

体験はどこでできるだろうか、と考えることが大切です。

また、静かな家庭か賑やかな家庭かによって、静かな場所がホッとする子もいれば、静かだと不安になる子もいます。そうした生活の背景や、それぞれの子どもの環境への関わり方等も踏まえて理解し、一人一人にとって必要な経験を考え適切な環境を構成する必要があります。

さらに、子どもの興味は主体的に環境と関わる中で変化していくので、その心の動きに即して、環境を再構成していく必要があります。例えば、年度当初の4月と8月では、生活の流れや人間関係が変化するので、保育室の環境は変わっているはずですが、一日の生活の中でも、友達と出会う朝と、遊びが深まってきた昼とでは、人間関係も変化していくと思うと、それに伴い環境も変わっていくのかもしれない。その環境が合っているかどうかは、子どもの表情や動きによって、子どもが答えを出してくれます。

## (3) 基本となる保育観

子どもは自由感を持つときに力を発揮し、成長していきます。この自由感とは、ただ自由に遊ぶということではなく、自由感を持ちながら考えたり遊んだりすることです。

子どもは、もの、人と交渉することを通して成長します。例えば、園の環境として、石や水、生き物等、融通性のあるもの、融通が利かないもの、絶対変わらないもの、変幻自在なものをご用意されているでしょうか。環境と自由に関

わり交渉することを、環境を通しての保育と呼びます。

また、教師は人的環境です。間接的な援助として子どもが自由に関わる環境を設定すること、直接的な援助として言葉掛けや手助けがあります。

悩んでいるときこそ、指針や要領に立ち返るとよいのではないのでしょうか。

### 3 環境を考える上での3つのポイント

前述から、環境を考えていくときに大切なポイントは3つになります。

(1) 乳幼児が育つのに必要な経験ができる環境かどうか。

(2) 環境に自由に関わることができているか。

(3) 固定された環境ではなく、子どもの動きや関心の変化によって変わる環境になっているか。

園はまさに第2の我が家と言えます。子ども中心の時間が流れ、ありのままの子ども性を出せる場所でありたいのです。幼児期は、思いのコントロールがうまくいかなかったり、思いを爆発させたりする時期です。それを押し込めて早くいい子にする保育ではなく、年齢にふさわしい姿を出せるようにすることがとても大事です。特に3～5歳児は、大人の期待に応えようとがんばってしまう姿があるので、保育者側が気を付けなければなりません。

第2の我が家で子どもらしさを十分に出させて育てる、その自分を抱えたまま小学校に上がって、今度小学校では自分のありのままを出す出し方を学んでいくことができるようにして送り出すことが、保育者にとって大事な仕事なのだと思います。

### 4 市内保育園の実践から考える

保育の基本である自由感、その年齢に合った主体的な姿が環境の中で守られているのか、実際にA園の実践を通して考えていきましょう。前述の3つのポイントを中心に見ていきます。

#### (1) A園の特徴

園庭を囲む形で保育室があり、思い立ったらすぐ園庭に出られます。中と外が繋がりがやすいという良さがあります。手作りの玩具等があり、温かい雰囲気があります。

#### (2) 実践を通して

##### ① 3歳児

3歳児は、自分が期待されていることがわかり、周りが見えてくる年齢です。自分でやりたい気持ちが出てきて、自信をつける必要がある時期になります。一方で個人差があり、周りのものや人に興味がないときには、相手に合わせないこともあります。仲間関係もできてくるので、「入れて」「だめだよ」ということが多々起こります。4月は、特に各自のペースで生活できる環境が必要です。

3歳児の室内遊びでは、手作りのアイスが並んだアイス屋さんが開店していたり、一人一人が好きな机上遊びをしたり、外廊下にござが敷かれ、のんびり雨の園庭を眺められるようになっていました。

環境を考える際、違う遊びの空間を作りながら、遊びと遊びが繋がることを意識して場所を作るとよいと思います。大きな机などは、遊びに必要なければ片付けたり、必要な大きさのものを選んだりします。机があることで空間が分断され、遊びが繋がりにくいことが考えられます。例えば、外廊下の空間で3人が盛り上がっていてとても良い雰囲気なので、室内のアイス屋さんとの

空間をつなぐような遊びがあったらよいのではないかと思います。4月は部屋が区切れたほうがいい場面もありますが、遊びが盛り上がってくる時期には、あまり細かく区切らないほうが盛り上がります。

また、他児との関わりが苦手な子の近くに、友達が寄ってきた場面がありました。保育者は、このときをチャンスと捉えて、相手の子がいる空間に繋げていく等の援助があるとよいです。

## ② 5歳児

5歳児は、園の中で最年長であり、誇りを持たせたい年齢です。5歳児ならではの保育として、他の学年には難しいクッキングを計画しています。園外に食材を買いに行く日のために、雨天を考慮して傘を差しての歩き方を教えるという意図があり、雨の日散歩を計画した場面を見ていきます。

先生が傘の差し方の見本を見せた後、一列に並んで傘を差して歩く練習をしました。その後自由時間があり、色々な姿が見られました。その場面を見ていきます。

傘を片手に、友達と一緒に駆け出します。子どもは走っているか止まっているかどちらかですね。水溜りの中に入る子もいます。長靴で水たまりに入るのは、誰にも怒られませんし、雨の日の特権です。傘を横にしたり、傘を振りまわしたり、バリケードにして友達と闘う子もいます。先生はかたつむり等を探して欲しかったのか声を掛けていますが、それ以外の楽しみ方がたくさんあったようです。

私が幼稚園に勤めていたとき、傘を開いて3、4つ集めておうちを作って、傘の中の自分の空間を楽しんでいた子がいました。

この日、子どもにとって必要な経験とし

て、先生が考えた活動は雨の日の安全な歩き方でしたが、安全面に関しては少人数にして出かける等の工夫ができそうです。

子どもにとって傘は、雨をただ、よけるためのものではなく、雨の日しか持てない面白いものであり、特別で大事なものです。きれいな色のもやキャラクターのもの、持てるのが嬉しくて仕方ないのです。そう思うと、傘のさし方を教えることも大事ですが、雨の日に傘を持ってする意味のある体験とは何だろうと考えると、もっと色々な可能性があったのではないかと思います。そうした、子どもの雨との付き合い方が描かれている『ずーっとずーっとあめ』（織茂恭子さく こどものとも年少版 2006年6月号 福音館）を紹介します。大人が考える雨と子どもの考える雨はだいぶ違うということがわかります。

## ③ 2歳児

「自分で」や「いや」を言い始める時期です。徐々に心と体のコントロールができるようになりますが、頭では理解していても、体がまだ十分ついてこない時期です。3歳を迎えたぐらいになると、自分が思うように体がコントロールできるようになってきます。自分の思いや考えがはっきりしてきて、やりたい思いがあるけれども、それは外から見るとわがまま、頑固と見えることがあります。

遊戯室で、踊りやサーキットで体を動かして遊ぶ場面を見ていきます。保育者が選んだ体操の曲が流れると、喜んで飛び出していました。音に反応して笑顔でジャンプはするけれど、子どもがわかる言葉（歌詞）で構成されている曲ではないので、踊りたいけれど動きがわからない様子です。例え

ば『幸せなら手をたたこう』『あたまかたひざぼん』等、動きがわかるものだと2歳児でも動きやすいです。わかりやすい簡単な踊りを作ってあげることでも十分ではないかと思います。

サーキットの中のミニハードルを跳び越す場面では、両足跳びで跳べず躊躇している姿がありました。2歳にとって、足元に障害物があるときに、怖くて跳べないというのは正当な反応です。保育者は、難しいことでも子どもを励ましていき、それができるようになると良かったと思いがちです。しかし、2歳の発達を踏まえてどんな活動が必要なのか考えると、自分の体を思うように動かすだけで十分楽しい時期なので、高さのないラインをまたいだり、ロープの上を歩いたりすることでも良かったのではないかと思います。

## 5 環境を考えるときの鍵

まず、自分の園やクラスの子どもの特徴を把握し、魅力を探しましょう。二つ目に、今育とうとしている子はどの子なのか考えます。毎日少しずつ変化していく姿を見逃さず、チャンスを捉え関わっていくことが保育者の役割だといえます。中には、皆と同じことをやらない子もいますが、その子が夢中になるものはなんだろうと考えます。「こっちが楽しいよ」と保育者側に引き寄せるのではなく、その子が好きなものに保育者自身が近づいていくことが、環境を考える鍵になります。

小学校以上の教育と最も違う点は、保育はオーダーメイドであるということです。小学校は教育課程が決まっているので、そうはできません。幼児教育では、保育者が自分のクラスの子に合わせた環境、保育を自由に考えて計画してよ

いのです。

## 6 保育の難しい点

保育では、子どものできることを伸ばすだけではなくて、できるかもしれないという可能性を見ることが必要です。「子どもの中にある種を育てる」と言ったりします。ピーマンに例えると、私達大人は大きかったり、曲がったり、ついその形に目がいってしまいます。しかし、ピーマンとしての美味しさを求めるとき、それぞれに違う種があるというふうに考えます。子どもの中に育とうとしている種があるのです。そこに、私達の子どもの見方、子ども観、人間の見方、人間観が問われます。障害児保育や、全てに通じること、基本はその子に合った保育をするということだと思います。

中には、困らせることをして、保育者の思うようにならない子もいます。その子を自分の保育を伸ばしてくれる、神様からのプレゼントみたいな人だと思ってください。子どもが成長する上でのトラブルはつきものです。クラスには、その様子を我慢して見ている子たちが周りにいます。困らせる子を大事にすると、「〇ちゃんが水たまりに入ったけど、先生がにこにこ笑ってるからやっていいんだ。」と伝わり、他の子どもたちが、安心して自分をいっぱい出していきます。

## 7 まとめ

まずは身近な生活を見直していきましょう。

1 日の中で自由な時間はどこにあるでしょうか。保育者自身に、保育はこういうものだという思い込みはないでしょうか。園の環境は生きて使われていますか。日頃から、子ども達が自由に使えるような環境を用意していると、子ども達自らがプランニングして遊びを進めていきます。今一度、自園の環境を子どもの目線から見直していただきたいと思います。

第3回 焼津市保育者資質向上研修会（抜粋）  
令和5年8月18日（金）  
会場：焼津市役所 大会議室1B